

桔梗ヶ原病院運転支援チーム の活動と意義

中村 真大
桔梗ヶ原病院

2024年12月15日

第8回日本安全運転医療学会学術集会

はじめに

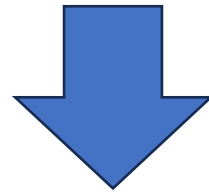
- 医療機関において,運転支援の方法が定まっておらず,現場のセラピストに委ねられている現状がある.
- 当院では,**2015**年より医師を中心として運転支援に携わっていた作業療法士(以下**OT**),言語聴覚士(以下**ST**)にて運転支援チームを発足し,運転再開にむけた活動を行ってきた.
- 今回は,当院における運転支援チームの活動経過,課題や役割について報告する.

運転支援チーム発足当初の歩み

●2015年よりドライビングシミュレーター(以下DS)を導入し,運転支援を開始した.

①運転支援開始当初の課題

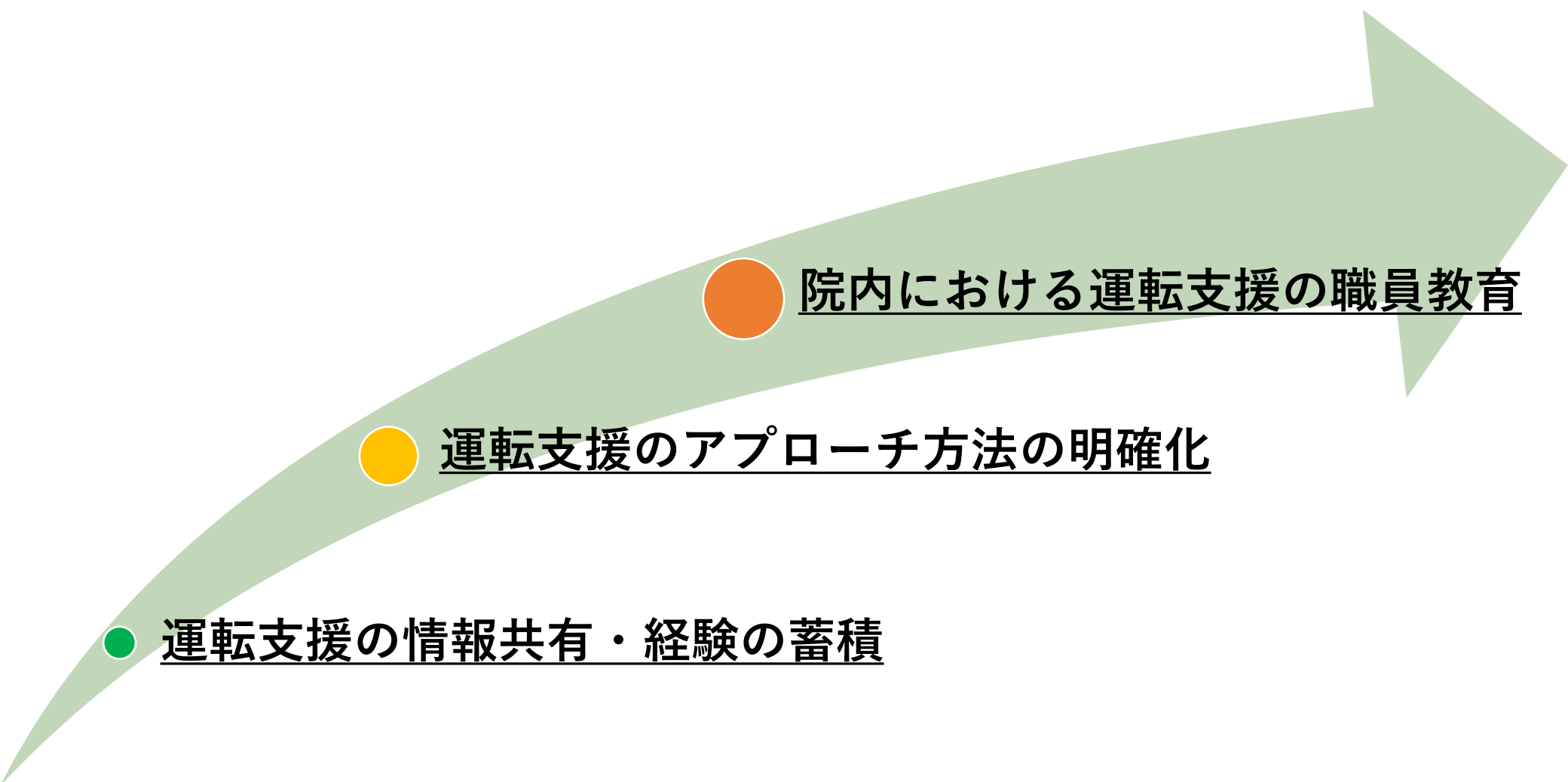
- ・ DSの操作方法や,走行コースが把握できていなかった.
- ・ 運転再開希望者に対するDSの指導方法が確立できていなかった.



課題を解決するために・・・

運転再開希望者に対して,効果的な運転支援を提供するために
運転支援の過程やアプローチ方法を整備する必要があった.

運転支援チームの活動の経過



● 運転支援の情報共有・経験の蓄積

● 運転支援のアプローチ方法の明確化

● 院内における運転支援の職員教育

運転支援の情報共有・経験の蓄積

- 運転支援チームの発足時は運転再開希望者が少なく、
運転支援の経験の蓄積に難渋した。



課題を解決するために・・・

①運転支援チームが関わった運転支援の情報・経験の共有

- ・DS実施時に困ったこと(めまいに対する取り組み・運転反応検査の判定基準の確認)
- ・DSの走行コースとDS実施時の指導方法
- ・運転再開に至らなかったケースを含めた全症例のアプローチ方法の振り返り

②運転再開後の継続状況の確認

1年後の運転継続の状況,事故の有無,事故状況の確認

③学会参加・発表による運転支援の情報収集(他院での運転支援の取り組み)

●結果

運転支援の情報共有・経験の蓄積を運転支援チーム内で行うことで,使用するDSの走行コースや指導方法が整理され,運転支援の基盤を構築することができた.

運転支援の過程・アプローチ方法の明確化 -課題-

- セラピストによって、課題設定、フィードバック方法、DSのコース選択が異なり、一貫性のある運転支援が実施出来ていなかった。
- DSの訓練を優先した結果、退院時のADL、運転再開の両方が成立しなかったケースを経験した。



課題を解決するために・・・

DSの走行コースの理解を深める取り組み、
アプローチの優先順位の明確化に向けた取り組みを実施した。

運転支援の過程・アプローチ方法の明確化-活動と結果-

●課題に対する運転支援チームの活動

①アプローチの優先順位の明確化

退院後のADL自立を最優先とした.次点で高次脳機能の改善を図り,そのうえで運転技能に対しアプローチを行う形に優先順位を明確化した.(図1)

②DSの走行コースの理解を深める

- ・ 運転支援チームが,実際にDSの走行コースを繰り返し走り返すことで走行コースの理解を深めた.
- ・ 運転支援チーム内で走行コースの特徴を整理し,高次脳機能障害との関連性を協議した.

●結果

運転再開に向けた機能改善の優先順位をつけることで,アプローチ方法やフィードバック方法が明確となった.

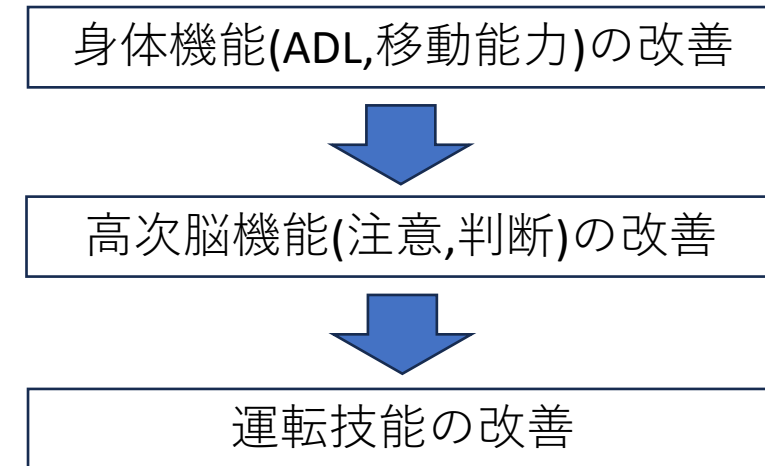


図1 アプローチの優先順位

院内における運転支援の職員教育 -課題-

●背景

運転再開希望者の増加に伴い、運転支援チーム以外のセラピストが運転支援に携わる機会が増加した。



運転支援チームと実際に介入するセラピストの間に
運転支援に関する知識量, アプローチの習熟度に差があった。



一定水準の運転支援を提供するために・・・

セラピストにおける運転支援の理解を深める取り組みを行う必要があった。

院内における運転支援の職員教育-活動と結果-

●OJT（On the Job Training）

①支援体制

- ・ 運転支援チームが、担当セラピストとチームを組み運転再開希望者に携わる体制に変更した。
- ・ 症例を通じ、運転支援チームが運転支援のアプローチ方法やDSのフィードバックを指導した。

●Off-JT（Off the Job Training）

①院内研修

- ・ 運転再開に関する法律の共有
- ・ DSの走行コースの解釈に関する勉強会の実施
- ・ 学会参加後の伝達講習
- ・ 新人職員研修(DSの使用方法・高次脳機能検査の解釈)

②院外研修

●結果

- ・ 運転支援における共通認識が広がることで、知識やアプローチ方法の標準化につながった。
また、セラピスト間でのディスカッション機会も増加した。
- ・ 運転支援チームがOJTとして携わることで、セラピストの運転支援に対する心理的な抵抗感が軽減した。

まとめ

- 運転支援チームとして全症例の運転支援の振り返りを行い,運転支援の情報・経験を蓄積したことで,DSを用いた運転支援の基盤を構築できた.
- 運転支援チームの活動の中で,身体機能・高次脳機能,DSの特徴から運転支援の過程やアプローチ方法を明確にしたことで,一貫性を持ったアプローチ方法やフィードバック方法を提供する体制ができた.
- 運転支援チームがセラピストに対し職員教育を行うことで,院内における標準的な運転支援を提供することができた.
- 今後は,一定水準の運転支援を提供することができる人材の育成が課題である.

結語

- 桔梗ヶ原病院では、「運転支援の情報共有,経験の蓄積」を柱とした運転支援チームの活動を行ってきた.
- 運転支援チーム内で情報と経験が共有されることで,院内における標準的な運転支援の提供につながるものと考えた.